

臍部腹壁下膿瘍排液から *Haoranjiana flava* を検出した 1 症例

◎高岡 那納実<sup>1)</sup>、森 三依<sup>1)</sup>、森山 麻衣<sup>1)</sup>、荒川 佑子<sup>1)</sup>、田中 優奈<sup>1)</sup>、加藤 大知<sup>1)</sup>、後藤 孝司<sup>1)</sup>  
大垣市民病院<sup>1)</sup>

【はじめに】*Haoranjiana flava* は 2016 年に中国で活性汚泥から新たに分離されたグラム陰性短桿菌で、*Chitinophagaceae* 科に属する。今回、患者の臍部腹壁下膿瘍から *H. flava* が検出された症例を経験したので報告する。

【症例】50 歳代、女性。慢性胆嚢炎で胆嚢全摘。術後 7 日目で胆汁漏のため TAZ/PIPC を 5 日間、術後 12 日目からは CMZ を 4 日間処方された。経過良好のため術後 19 日目に退院となった。退院から 11 日後、臍部周辺の痛みを訴え再受診。臍部腹壁下膿瘍を形成しており、膿瘍ドレナージが行われ、膿瘍と血液培養が提出された。膿瘍から本菌が検出されたが、血液培養は陰性であった。再受診日に入院され、CMZ を 2 日間、3 日目から LVFX を 5 日間処方され経過良好のため 4 日目に退院となった。

【微生物学的検査】提出された膿瘍のグラム染色にて小型のグラム陰性短桿菌を認めた。羊血液寒天培地（栄研化学）、チョコレート寒天培地（日本 BD）、BTB 乳糖寒天培地（日本 BD）に接種した。35℃、5%CO<sub>2</sub> 下で 2 日間培養後、羊血液寒天培地とチョコレート寒天培地にクリーム色

で約 3mm のコロニーが発育し、溶血は認められなかった。BTB 乳糖寒天培地には微小なコロニーが発育したが、質量分析法での同定はできなかった。オキシダーゼ試験陽性、カタラーゼ試験陽性、ID テスト NF-18 および HN-20 ラピッド（島津ダイアグノスティクス株式会社）を用い同定試験を実施したが、同定はできなかった。遺伝子解析の結果、16SrRNA 遺伝子の塩基配列が *H. flava* の基準株と 100% 一致したため *H. flava* と同定した。また、薬剤感受性試験では TAZ/PIPC 1μg/mL、CMZ 1μg/mL、LVFX ≤0.12μg/mL で LVFX に良好な感受性を示した。

【考察】当院にある質量分析法や同定キットでは、本菌の同定はできないため、今後は同定方法の確立が望まれる。また、現時点での症例報告は確認されていないため、今後症例の収集が必要であると考えられる。

【謝辞】今回、遺伝子解析をしていただきました  
東京医科大学 微生物分野 大楠教授に感謝申し上げます。

連絡先：0584-81-3341 （内線：1265）